

博士學位論文

内容の要旨
および
審査結果の要旨

甲第26号

2003

創価大学

本号は学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第8条の規程による公表を目的として、平成16年3月19日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位番号に付した甲は、学位規則第4条2項(いわゆる課程博士)によるものである。

創価大学

| | |
|---------|--|
| 氏名(本籍) | 藤本 和子(岡山県) |
| 学位の種類 | 博士(英文学) |
| 学位記番号 | 甲第26号 |
| 学位授与の日付 | 平成16年3月19日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 創価大学大学院学則第17条第2項 創価大学学位規則第3条の3第1項該当 |
| 論文題目 | The Present Perfect and the Simple Past in English Pedagogical Implications |
| 論文審査機関 | 文学研究科委員会 |
| 論文審査委員 | 主査 山本 千之 文学研究科教授 委員 宮井 捷二 文学研究科教授 委員 石田 安弘 文学研究科教授 |

The Present Perfect and the Simple Past in English Pedagogical Implications

Kazuko Fujimoto

論文要旨

大学における英語教育の現場で著者は、英語の現在完了形と単純過去形の使用をめぐり、日本人英語学習者にはある傾向があることに気づいた。現在完了形の使用が適切であるとみなされる場面において、学習者が単純過去形を使用する傾向が見うけられるのである。なぜこのような傾向が見うけられるのか、そしてこれらの動詞形について何をどのように指導すれば、学習者がこれらの動詞形をより適切に用いることができるようになるのかということ考えたことが本論文の出発点となっている。

第1章では、まず、自らが感じていた日本人英語学習者の、これら2つの動詞形運用における傾向は間違っていないかを調査するために、日本人大学生209人に *elicitation test* を施行した結果、やはり確かにこの傾向があることが明らかになったことを述べ、したがって、その傾向の原因の解明と解消の研究は意義のあることを論じる。

次の3点を解明すべき問題点として挙げる。

1. 現在完了形の *essential feature*(主要な特性)は何であるのか。
2. 現在完了形と単純過去形の相違点と、類似点は何であるのか。
3. 日本人英語学習者にこれら2つの動詞形について何を指導すべきか。

Celce-Murcia and Larsen-Freeman (1999) は、英語文法は "three dimensions" (*form, meaning, use*) から教授される必要があると提唱するが、現在完了形と単純過去形について考察する場合にも、それぞれがいかなる形体をもち、その形体が何を表わすのか、そしてどのような場合に、なぜ一方の形体ではなく、もう一方の形体が用いられるのか、この3つの次元からおこなう必要があると考える。(本論文では、これら2つの動詞形に、特に時の概念からのアプローチを試みるため、*meaning* ではなく、*feature* という用語を用いる。)

第2章では、現在完了形を *tense*(時制)と *aspect*(相)のいずれの範疇で扱うかという長年にわたり、様々に議論されている問題について考察し、本論文では、両者の *combination*(結合)と考えるが、特に日本人中学生、高校生への指導においては、学習上の混乱を防ぐため、*tense* の範疇で扱うことを提唱する。

次に、現在完了形の歴史的発達をたどることにより、Curme (1931)や Elsness (1997)などの言うように、現在完了形が、現在と過去を結びつけるべく、*semantic shift* と *syntactic shift* を遂げてきたことを述べる。

Twaddell (1963²)の *current relevance*(現在との関連性)、Reichenbach (1947)の *tense logic* および Declerck (1991b)の *TE-up-to-t₀* [*TE = established time; t₀ = temporal zero-point*]の理論を比較検証することにより、これらの理論が、現在完了形の *primary and essential feature* が *up-to-now* という時の概念であることを決定づけるのみならず、この *up-to-now* という時の概念が、現在完了形と単純過去形の違いを決定づけるものであるということ論じる。

単純過去形と現在完了形の特性を考察した結果、それぞれの動詞形は次のようなことを表わすといえる。単純過去形は、発話時点とは切り離された過去における出来事や状況について言及するが、一方、現在完了形は、過去のある時点において起き、発話時点まで続いているか、あるいは実際には続いていなくとも、現在との関連性をもつ出来事や状況に言及する。

現在完了形について、さらに考察を進め、過去に起きた、あるいは始まった出来事や状況が

発話時点まで実際に続いているか否かにより、実際に続いているタイプを *continuative present perfect*(継続現在完了形)と呼び、実際に続いていないタイプを *indefinite present perfect*(非継続現在完了形)と呼ぶ。後者のタイプはさらに3つのサブタイプに分類する。では、何が、*continuative present perfect* と *indefinite present perfect* との分類を決定づけるのか。Leech(1987)などのように、状態動詞と動作動詞の観点から2つのタイプの分類について述べる先行研究もあるが、*study* や *live* のように状態動詞と動作動詞の両方の性質をもつ動詞もある。さらに、これらの動詞の現在完了形は、例えば、*He has lived in London.*—Bauer (1970)/*He has lived in London for twenty years.*—*Ibid.*という文が示すように、*continuative present perfect* と *indefinite present perfect* 両方の解釈が可能でありうることから、現在完了形のタイプは、状態動詞と動作動詞の分類のみから決定づけられるものではないことを述べる。さらに *continuative present perfect* と *indefinite present perfect* の2つのタイプは動詞のみならず、副詞類の表わす時の概念(発話時点を含むか否か)、発話の前後関係などがあいまって決定づけられることに言及する。さらに、*indefinite present perfect* の3つのサブタイプそれぞれの主要な特性(*recentness*, *continuing result*, *after-effect of the experience* など)を指摘する。これら3つのサブタイプは互いに排除し合うものではなく、それらの特性を共有する場合もあり、かつ、3つのサブタイプに共通する特性(*resultativeness*, *completion before the utterance point*)もあることを述べる。

最後に、現在完了形の一次的特性であり、かつ現在完了形と単純過去形を区別する特性は、現在完了形にはあるが、単純過去形にはない *up-to-now* という時の概念であり、上で挙げた *recentness* などの特性は現在完了形の二次的な特性であり、2つの動詞形の相違を決定づけるものではないことを論じている。

第3章では、これら2つの動詞形の間、類似点もあることを論ずる。その類似点が学習者にこれらの動詞形を混同させる一因でもあることを指摘する。

次にこれらの動詞形の *time reference* における相違点を、第2章での検証を踏まえながら明らかにする。単純過去形は、発話時点よりも前に起きた出来事や状況について言及し、それらの出来事や状況が終わった時点と発話時点は分離している。過去の出来事や状況は、過去から発話時点に向かって伸びるが、発話時点までは及ばない時の流れの中でとらえている。話者は、それらの出来事や状況を現時点と切り離して捉えている。一方、現在完了形は、過去の時点で起きた、あるいは始まった出来事や状況が発話時点まで続いているか、あるいはそれらの出来事や状況が実際には続いていなくとも、何らかの影響が発話時点まで続いていることを表わす。過去の出来事や状況は、過去に始まり発話時点に達する、発話時点を含む時の流れの中でとらえている。話者はそれらの出来事や状況を発話時点と関連づけているのである。なぜ一方の動詞形が用いられるのかは、この *time reference* の違いと、話者が *current relevance* を含意するか否かによることをあらためて論ずる。

さらに、これら2つの動詞形と副詞類の共起の問題を取り上げ、副詞類がそれぞれの動詞形と共起するかしないかは、やはり、*up-to-now* という時の概念が関係していることを述べる。

第4章では、日本人大学生(628人)、日本人高校生(113人)におこなった5種類の *elicitation test* のデータ分析と、その結果から判明した内容をまとめる。(日本人大学生628人のうち、149人は5種類のうち2種類の *test* を受ける。) これらの *test* は次の3つの目的で施行された。

1. 現在完了形の使用が適切である場面において、日本人英語学習者には単純過去形を用いる傾向があることをさらに確認する。
2. どのような場合に、なぜ学習者が現在完了形ではなく、単純過去形を用いるのか解明する。

3. 2つの動詞形の適切な使用の指導について、著者の提案する教授法が効果的なものであるか否かを検証する。

現在完了形の使用が適切な場面でも、なぜ、日本人学習者には単純過去形を用いる傾向があるのかということについて、次の2つの **assumption** をたてた。

1. L1 (the first language, 母語である日本語)の干渉ではないのか。つまり、英語と異なり、日本語には過去と完了それぞれを表わす独立した形体がなく、「-タ」という形体が過去と完了の両方を表わすために、英語動詞形に対応する日本語が「-タ」を含む場合には、現在完了形の使用のほうが適切である場合でも単純過去形を用いてしまうのではないのか。
2. 学習者の副詞類への強い依存のためではないのか。つまり、2つの動詞形を選択する際に、学習者が、時をあらわす副詞句などの文脈要素に強く依存しているために、これらの手がかりがない場合には、現在完了形の使用のほうが適切である場合にも安易に単純過去形を用いてしまうのではないのか。

これら2つの **assumption** も **elicitation test** によってその妥当性が裏付けられた。2つ目の **assumption** に関連して、**this morning** や **today** など現在完了形、単純過去形の両方と共起する副詞(句)と共に、日本人学習者の単純過去形を用いる傾向性も明らかになった。

著者の提案する教授法が効果的かどうかを検証するために、第2章で述べた、現在完了形と単純過去形の **time reference** の違いを **preliminary instruction** として与えられたクラスとそうでないクラスにおいて、**test** をおこなった。その結果、与えられたクラスのほうに、これらの動詞形のより適切な使用が見うけられることから、2つの動詞形の **time reference** を指導することは、学習者がこれらを適切に使い分けるのに効果があることが証明された。

第5章では、なぜ、第4章の2つ目の **assumption** で述べたようなことが起きるのか、その原因を解明するために文部科学省による学習指導要領の指導方針、および、複数の高等学校、中学校用英語テキスト教師用指導書における指導法を調査し、それらに原因および、問題点があることを指摘し、その改善策を提唱した。

終章である第6章では、本論文のまとめとして、各章の要旨が総括的に示される。それぞれの言語は時を表わすための独自の文法体系をもっている。母語と英語の間に、時を表わす **device**(手だて)の相違がある場合に、英語の時制のシステムの習得は、**ESL/ EFL** の学生にとって必ずしも容易ではない。現在完了形と単純過去形を区別する **primary and essential feature** は時の概念であるとし、これら2つの動詞形の **time reference** の違いを対照的に、強調して、くり返し指導することが、学習者のこれら2つの動詞形の適切な使用に効果があると提案する。

審査の要旨

平成15年12月10日審査委員全員出席のもとに最終試験を行い、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。その際、次のようなことなどが指摘された。

本論文では現在完了形と単純過去形の2つの動詞形について、日本語と英語との対照研究という点では十分調査研究がなされており首肯しうる提案がなされているが、同族言語であり英語と最も関係が深いドイツ語との対照研究の点では殆ど研究がなされていないといえる。しかし、たとえば英語では ***Hans has left at six.** は非文であるのに、それに対応するドイツ語の **Hans ist um sechs abgereist.** は適格文であるという事例があり、もし本論文と同じ **elicitation test** を英語対ドイツ語で施行した場合、どのようなデータが得られるのか興味ある研究課題と

なると思われる。

本論文では2つの動詞形と共起する副詞類——特に **temporal adverbials**——について考察がなされている。一般に **yesterday** のように明らかに過去を示す時の副詞類は現在完了形とは共起できないといわれているが、Swan(1995)が挙げる **The horse's trainer has had a winner here yesterday** などの例のように、ニュースの報道、新聞、会話など口語では、普通ではないが共起することが不可能ではないという事実がある。Swan も述べているように外国語としての英語学習者はこのような用法はさけるべきであろうが、このような言語事実もあるということ視野にいれて研究をすすめるべきであろう。

本論文で中学・高校生に対する現在完了形の指導について改善策が提唱されているが、中学・高校生の中には抽象語の理解が困難な者も多いので、**time concept** の点から現在完了形の **essential feature** を教授する際、可能な限り抽象語の使用を少なくすることが望ましいということが指摘された。

現在完了形を含む時制の研究は、これ迄長年にわたってなされてきており、先行研究、関連文献は極めて多数あるといっても過言ではない。現在完了形のあらわすものについても先行研究で様々に論議されているが Lyons(1981)も述べている如く未だ決定的なものはないといえる。かかる現状で本論文が単に屋下に屋を架すだけに終わらない意義は何であるかといえ、数多くの先行研究を精査、比較検討して問題点を明らかにし、独自の見解を出し、現在完了形の **primary and essential feature** であり、かつ現在完了形を単純過去形と区別するものは **up-to-now** という時の概念であることを指摘したこと、現在完了形に関する英語学・言語学上の理論を英語教育の実践の場に応用し、現在完了形の指導に関して日本の英語教育界に有益な改善策を提言したことである。

部分的には重なる点もあるといえるが、本論文と全く同じ手法で同じテーマについて研究した先行研究・論文は他に無いといえるので、その意味でも本論文は **originality** があるといえる。

方法論としては仮説をたてて、それを **elicitation tests** のデータによって証明するという堅実なやり方がなされており全く問題がない。

以上の点を勘案して審査委員全員、本論文は博士論文として認めるに値すると判定した。よって著者は博士(英文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。

ABSTRACT

THE PRESENT PERFECT AND THE SIMPLE PAST IN ENGLISH PEDAGOGICAL IMPLICATIONS

Kazuko Fujimoto

Soka University, 2003

Supervisor: Chiyuki Yamamoto

The aim of this study is to investigate the essential feature and the core time concept of the present perfect by making a comparison with those of the simple past.

This study argues that the most crucial difference between the present perfect and the simple past lies in the interpretation of their time concepts. The present perfect refers to a time period extending from the past to the present, thus indicating that an event or situation which occurred in the past continues actually or potentially up to the present moment. In contrast, the simple past refers to a point or period in the past, thus implying that an event or situation in the past does not exist any longer at the

utterance point.

Elicitation tests of Japanese university and high school students, and investigation of teaching points at school have shown that Japanese students tend to use the simple past instead of the present perfect even when the latter form is appropriate. This tendency stems from their L1 interference and the method of instruction at junior and senior high schools. The Japanese morpheme *-ta* acts as both a past tense marker and a perfective aspect marker. When the Japanese translation for the English verb form takes *-ta*, Japanese students are likely to use the simple past. They also have a tendency to rely on certain types of temporal adverbials in choosing the verb form.

Elicitation tests have also proved that preliminary instruction in the use of the present perfect and the simple past with respect to their differences in time concepts would be an effective strategy to enable the students to use the appropriate verb form.

This study stresses the importance of making students gain a sound understanding of the time concept of the present perfect in contrast with that of the simple past. Repeated instruction in class would definitely lead to improvements in the students' ability to select the appropriate verb form.